

「風よりも速いシカ」

高橋桐矢

年老いたシカの耳に、トンボが止まりました。

耳を動かすと、トンボは、つうと飛んでいきました。

のんびりとした森の午後です。

年老いたシカは、立ったまま、うつらうつらとしています。このごろは、一日の大半をそうしてすごしています。

「おじいさん。こんにちは」

声に目を開けると、目の前に、若いシカが立っていました。体は一人前の大きさですが、まだ角は短く、やっと二年目の枝が生えてきたばかりです。鼻先はつやつやとしたピンク色で、体中に若さがみなぎっています。

若シカは礼儀正しく前足をそろえてたずねました。

「風より速いシカ、を知りませんか？」

年老いたシカは、首をひねりました。

「さあ……なあ……」

のんびりと間のびした答えに、若シカの顔に落胆がうかびました。何も隠さないのが若さです。ちゃんと挨拶できただけマシというものです。

年老いたシカは、風上に鼻を向けました。年をとって鼻先がかわいてきて、匂いや風がわかりにくくなったのです。

春の森にふく風は、ただやわらかくうらかなばかりで、何も教えてはくれませんでした。

「それだけでは分からんなあ。どんなシカなんだね」

「え？ ああ。はい」

若シカがふりむきました。せつかちにも、歩き出そうとしていたのです。

「その名で分かるかと思っただけです。そうですね。すごく速いんです。ええと」

若シカがうつむいて言葉を探して考えているのを、年老いたシカはじっと待っていました。

若シカが顔を上げました。

「どんなすばしいキツネもしつこいオオカミも、風より速いシカには追いつけないんです」

若シカはとくいげです。年老いたシカは言葉を選んで答えました。

「速いシカならそうだろうな」

若シカは、あちこち見回しました。どうも落ち着きがありません。

「あとはいえと」若シカの顔がぱつとかがやきました。

「あちこちの森で、いろんなシカと競争して、一度も負けたことがないんです」

そんな話ならどこかで聞いたことがあるような気がします。自分の速さに自信があると、力だめしを試してみたくなるものなのでしょう。

「ほう……あとは？」

「そうだ。ハヤブサと競争して、勝ったんです！」

年老いたシカは目を細めました。それもどこかで聞いた話です。いえ、どこかで聞いたというよりは……。

若シカが、ぴよんと跳ねました。

「ああ！ 一番有名な話を忘れていました！ 大きな山火事があつたとき、風より速いシカは、森中に火事のことを知らせてまわったんです！ 知ってると思いますけど山火事っていうやつは、風に乗ってとてつもない速さでひろがりますからね。風より速いシカがいなかったら、たくさんの動物が燃えてしまっていたでしょう」

年老いたシカは、もぐもぐと口を動かしました。どう答えようか迷っていたのもある

し、何本か歯が抜けてしまつてから、歯の間から息がもれて、早く話せないのです。

「うむ……」

どうやら、若シカが話しているのは、年老いたシカの若い頃のこのようなのです。

そういえば、若い頃、調子に乗つて「おれは風より速い」と言ったことがあつたような気もします。それがいつのまにか、どこにどう伝わつたか、「風より速いシカ」になつたのでしょうか。

若シカは、目をかがやかせて話しています。

「風より速いシカは、九十九頭のシカと競争して勝つたんです。でも百頭目にも勝つとはかぎらないでしょう？ そうなんです。ぼくは、風より速いシカと競争したいんです。だから、森をまわつて、風より速いシカをさがしているんです」

「おまえさんも速いのかね」

年老いたシカは聞いてみました。若シカは、ちらつとくやしそうな表情を浮かべて、足元の土をかきました。

「生まれた森では一番速かつたんです。でもみんな、風より速いシカはもつと速いつて言うんです。だから」

ふいに声に力がこもりました。

「どうしても風より速いシカと競争したいんです。そしたらぼくはもっと速いってことになるでしょう」

「お若い。その風より速いシカの話、あんたはいつ聞いたんだね」
若シカは、胸をそらしました。

「小さい頃から聞いてました！ 角に二年目の枝が生えたら勝負しにいくんだって決めてたんです」

年老いたシカは、自分の体を見おろしました。

ばさばさとかわいてところどころハゲた毛並み。たるんで弱々しい筋肉。かすむ目に、聞こえにくくなつた耳、ぬけた歯。ぼんやりとした頭。

かつて、風より速かつたシカは、今はもう、そよ風にも負けるくらい、年をとってしまいました。

年老いたシカは、若シカをつくづくとながめました。

黄金色の毛並みに、しなやかで力強い筋肉、かがやく瞳。ピンク色の鼻先。見るからに若さに満ちあふれています。

若いから、今日はきのうより速く、明日は今日より速く走れるようになると信じられるのです。

きのう出来たことが今日できなくなり、明日はもっと……。未来がこぼれるように失われていく日がくるなどと、考えたこともないのでしよう。

だから、昔、風より速かったシカが、年月を経て年老いて、とつくに走れなくなっているかも知れず、思いもしないのです。

本当のことをつげる必要はないと思われました。

年老いたシカは、ゆつくりと首をふりました。

「さあ、知らんな。わしは聞いたことがない」

「そうですか。では別な森に探しに行ってみます。きっと風よりも速く、あちこちの森をとびまわっているのでしょうね。ぼくも急がなくちや追いつきませんね。おじいさん、ありがとうございます」

「ああ」

年老いたシカは、若々しく立派なシカが、風のように速く走っている姿を思い浮かべました。

それはかつての自分です。

でも……。もしかしたら。

今でもどこかの森で、風よりも速いシカが野山をかけている、そんな気がしました。

「お若いの」

年老いたシカは、去ろうとする若シカを呼び止めました。若シカがふりむきました。

「風より速いシカに会ったら、……どうかよろしくつたえておいておくれ」

若シカは不思議そうに首をかしげました。年老いたシカは、微笑んでつけくわえました。

「いつまでも、いつまでも元気で、と」

若シカは「わかりました」とうなずきました。

終わり